

書 評

化合物命名法 (第2版) —IUPAC 勧告に準拠— ▶ 日本化学会命名法専門委員会 編

化合物命名法 (第2版) —IUPAC 勧告に準拠— / 日本化学会命名法専門委員会 編 / 東京化学同人 2016 / B5判 200ページ 1,400円+税

「ギョエテとはおれのことかとゲーテ言い」

生化学の世界も似たような状況がある。大昔のことだが、「先生が講演中にサイミン、サイミンとおっしゃっていたのはチミンのことですか？」と質問した人がいた。物質名がわからなくては、研究も教育も始まらない。化合物命名法の本は、生化学者にとっても必携の書であることは言うに及ばない。

本書は2011年に刊行された書の第2版となっているが、2013年に出たIUPACの勧告の要約が加わっている。本書によると、この勧告はこれまで併用が認められていた名称のうち、どちらを推奨するかを定めるもので、将来はこの規則が推奨する名のみが使われるようになるだろうという。根源的な変更を提案している勧告で、したがって本書は改訂版と呼ぶ以上の大幅な変更を含んでいる。ただし、この新たな勧告が理解できなくても、今すぐ困るということはないらしい、という意味では、急ぎ書店に駆け込まなくては……といった書ではない。とはいえ、命名法を教授する、あるいは学習する者にとっては不可欠な書であるし、そうでなくてもいずれ身近に置いておく書であることは自明である。本書の重要性は書評など読むまでもないし、だから書評は書く必要もない。

その上、表紙をめくった瞬間、私の眼には同級生の名が飛び込んできた。編纂に当たった5名の委員の中に2名も並んでいるではないか！ この本にケチをつけては、私はもう二度と同級生の会には出られない。まあ、歳を考えれば今後そう長くは続かない会だが……。

書評の必要もない本とわかっていて、なぜ書評を引き受けたかという、絶妙なタイミングで依頼があったからである。最近、私は幸運にも新たな代謝物質を発見した。ささやかな発見ではあるが、ウキウキしていないで間違いの

ない系統名を書かねば……それには手元の書はかなり古いので大学に戻り、図書館でも行くかと考えていたところであった。何しろ生化学者は命名に関し、過去に何度も誤りを犯しているから慎重に構えざるを得ない。学生のころ習ったフルクトース1,6-ジリン酸はビスリン酸に、DPNはNADに変わった歴史を忘れるわけにはいかないと自らにいい聞かせていたところであった。

本書は調べるための本で、読む本ではない。辞書のように必要に応じて調べ、そのついでに目に飛び込む前後のページの記述に引き込まれて知識が増えていく……といった種類の本である。というわけで通読はあきらめ、書評を引き受けるきっかけとなった自分の化合物の命名を調べ始めたのだが、私には荷が重過ぎた。当初、2013年の勧告にも対応している名称（優先IUPAC名、略称PIN）をつけようと努力したが、これでいいのか専門家に聞かないと自信が持てなかった。専門家を頼るにしても、本書に目を通しておかなければ、失礼ではないか。やはり必読の書であることに変わりはない。

その後は、思いつく代謝上の物質名などを調べてみた。置換基の名称の一覧表やChemical Abstractの索引語とIUPACによる物質名の対照などの付録、それに巻末の索引がとても便利で使いやすい。調べてみて、生化学ではもっぱら慣用名が使われ、化合物名に関しては有機化学との間に大きな溝があることも改めて実感した。しかし、プリン、ピリミジンの位置番号など、生化学分野の用語の多くは当面、従来通り使い続けてよいようである。それでも字訳のルールを解説したページや合成高分子（たとえばG,Cのコポリマーなど）の命名法のページは、生化学者にとっても必読である。本の大きさも、そして値段も手ごろであり、研究室に……というより研究者個人に必携の書には違いない。

(大島泰郎 共和化工(株)環境微生物研究所)